

地域活性化という「遊び」

49

京都市
福知山市 「みわ・ダツシュ村」から

山本晋也

しゅわーん
寒空に竹とんぼが舞います。

竹 とんぼと言っても
子たちが取り組んでいるのは
スーパー竹とんぼ。

竹とんぼを空気力学や飛行力学に基
づいて精密に加工し
高度や飛行距離
滞空時間を競うというもの。
三角定規に分度器コンパス
0・3mmのシャーペンに
方眼紙などを使い



9機目。芯はカーボン、
羽根の厚さ0.7mmという力作。

まず羽根の型紙を作成。

山から切り出した

分厚い孟宗竹を使って板を作り

それに羽根の形を転写。

そこから羽根を

薄く削り出していくのですが

何しろスーパー竹とんぼというだけ

あって

本物の航空機のごとく

極限まで軽量化が求められます。

最終0・7mmくらいまで

薄く削っていくので

最後は少し間違えると

割れてしまいます。

うまく削り終えたところで

ひねりを加えるために

熱を加えて曲げていくのですが

これも慎重にやらないと

全てが水の泡。

冬は来年の薪の準備や

獣害柵の修復など

いろいろ忙しいのですが

そんなものそっちのけ。

気が狂ったように

毎日作り続けています。

最 初は

竹だけで作っていたのですが

競技によっては

異素材を使ってもいいらしく

軸をカーボンにしたり

飛ばす際に手が滑らないように

軸に細い紙やすりを

らせん状に巻くなど

いろいろ工夫をしています。

彼らがお手本にしている

すごい人になると

限界集落で生きていくには

スーパー竹とんぼ作りも重要!?

羽根の一番薄いところは0・2mm。

羽根の先端部分に

タングステン埋め込み

回転した時にぶれが出ないように

正確に中心をとると

高度40m飛行距離100m

滞空時間も20秒を超えるそうです。

現在彼らの高度は15m

飛行距離30m

滞空時間10秒くらいでしょうか。

ただ

競技は高度、飛距離、滞空時間

それぞれ分けて競うそうなので

羽根の形や厚み

ひねり角度などは

何を優先するかで

全く変わるといこと事です。

しかし

あまりにも仕事を手伝わないので

「いい加減にしろ!」と

一度は怒り心頭。

大爆発して怒ったのですが

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを営むも食材を種から作ってみたいくなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダツシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人々が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダツシュ村副村長。



孟宗竹から作った竹の板。



こういう状態になると、もう何を言っても聞かえません。

サイトを見ながら設計や組み立て。



さあ試験飛行！

それでもその怒号が全く聞こえないかの如く夢中でやりつづけていますので一旦怒りは横へ置いておいて子供たちがそこまで熱中するスーパー竹とんぼとは一体いかなるものかと調べてみましたら前述のような次第で大人でも興味を持った人はスーパー竹とんぼについてブログで1000回以上も記事を書くほど面白いものでした。実際に競技に熱中している人のほとんどは大人です。

競技で何度も優勝されているチャンピオンの岡島さんという方は大人というかもうおじいさん。ちよっと興味を持ったのでいろいろ調べていると岡島さんがテレビに出演された時のインタビューが出てきました。お話の中で出てきた座右の銘は一意奮闘。竹とんぼでも何でもいいのだけれど何か一つのことに集中して懸命に努力をすれば未来は自然と開けるといふもの。この言葉を聞いて仕事を手伝わない子供たちを頭ごなしに怒ってしまっただけ少々反省していた僕ですが続けて聞いた岡島さんの話の中にスーパー竹とんぼで最も大切なのはバランスというのも出てきて薪割りや獣害柵の補修も限界集落で生きていくにはやはり重要と思ひ直し怒ったお詫びに子たちには高精度のノギスを買ひ与え最終的にはどっちも一生懸命やるように！と締めたのであります。